

# アメリカにおけるハイエクの『隷属への道』

——思想の受容・普及プロセスからのアプローチ——

吉野裕介

## I 問題設定

### 1. 『隷属への道』とその位置付け

1944年にイギリスで刊行されたフリードリッヒ・ハイエク (Friedrich Hayek, 1899-1992) の『隷属への道』(*The Road to Serfdom*, 以下RSと略記)は、かれの著作のなかで最も多くの人びとに読まれた本である。その数を正確に把握することは困難だが、数十カ国で販売され、少なくとも35万部以上の販売部数 (Hayek 2007, 1) があり、いまなお売れ続けている。

RSはこれまでに何度も版を重ねてきた。まず1944年にイギリス版が、次に1946年にアメリカ版が刊行された。1956年のアメリカ版ペーパーバックはハイエクの新たな前文が添えられており、1976年にも第2版が刊行された。そしてハイエクの死後1994年にはフリードマンの前文を添えた第3版が出版された。さらにアメリカ版ハイエク全集プロジェクトの一環として、2007年に『隷属への道—決定版』(*The Road to Serfdom: Definitive Edition*) が刊行された<sup>1)</sup>。コールドウェルの編集と脚注が添えられた本版は、これまでの前書きや注などをすべて収録しただけでなく、その前後に書かれた関連

の文書も収録され、「決定版」にふさわしい内容となっている。

RS執筆前後のハイエクは、イギリスに職を得るきっかけとなった理論経済学的な研究から徐々に関心を移し、晩年まで続く社会哲学的な著作の執筆へと舵を切る時期にあった<sup>2)</sup>。1930年代の社会主義経済計算論争への参戦、1936年には社会哲学的な洞察への扉を開いたとされる論文「経済学と知識」の公表を経て、1952年には方法論的な著作『科学による反革命』(Hayek 1952a) と心理学の書『感覚秩序』(Hayek 1952b) を出版した。RSはその間の時期に上梓されている。

ハイエク自身は初版の前書きで、RSを初めから明確なメッセージを伴った「政治的な書物」とみなしている (Hayek [1956] 2007, 40)。しかしながら先行研究のなかには、RSに独自の位置付けを与えているものがある<sup>3)</sup>。例えばBurton (1984, xi) は論文集『ハイエクの「隷属」再訪』の導入部で、「『隷属への道』は、経済学や社会科学の認識論、政治経済学における基本的な問題に関するハイエクの他のライフワークとは分けられた」本と評している。またO'Hear (2006, 132-34) は、ポパーと比較しつつ、RS

\* 本稿で使用した資料の使用と翻訳について許可をくださったスタンフォード大学フーバー研究所およびブルース・コールドウェル教授 (デューク大学) に感謝申し上げます。また本論文の作成過程において匿名レフェリーと編集委員会から非常に有益なコメントをいただいた。記して深謝したい。もちろん、ありうる誤りはすべて著者の責任である。本研究はJSPS科研費「20世紀アメリカ経済学の方法論と思想におけるオーストリア的源泉」(08J00784) および「アメリカにおける現代オーストリア学派の史的発展に関する研究」(24730184) の助成を受けたものである。『経済学史研究』55巻1号, 2013年。© 経済学史学会。

執筆当時のハイエクとポパーの思想に共通する個人主義的な特徴を強調し、集団主義的な色彩の濃い後期の著作との隔たりを指摘している。かくしてRSはハイエクの著作のなかで最もポピュラーな本である一方で、他の仕事との連関があまり強調されることのない、ユニークな著作だと言える。

## 2. 思想の普及や受容プロセスに注目する アプローチ

近年経済思想史研究が多様に発展するなかで、思想の内在的分析だけでなく、それが持つ影響に注目する、つまり思想の受容や普及に注目するアプローチを採る研究が見られる。例えばMirowski and Plehwe, eds. (2009)では、ハイエクが発起人となり組織されたモンペルラン・ソサイエティの成り立ちの過程やその発展について様々な視角から論じられている。さらにJackson (2010)は、モンペルラン・ソサイエティの中心的存在となった英国における自由主義思想家と同時期のドイツ語圏のオールド自由主義思想家の交流を明らかにした。これらは自由主義経済思想が人びとに受容され普及していくプロセスを考察することで、その新たな側面を闡明している。本稿で採る方法も、これらと同様である。すなわち、人的交流やある著作の受容や普及プロセスに着目し、思想の新たな側面を明らかにするというアプローチである。

現在の通俗的な理解では、「新自由主義」とはハイエクやフリードマンの経済思想にその源泉を見ることが多いと言えよう。しかしJackson (2010, 130)の論考でも指摘されているように、RS以前にも新自由主義的な経済思想は存在した。そこで第一の疑問として、RSの再検討により、「自由」や「自由主義」という用語に整理を与えるとともに、ハイエクの思想について新たな側面から光を当てるべきではないかと考える。

アメリカの経済思想に目を転じてみよう。日

本における先行研究(久保1988, 田中2002, 高2004)において論じられているように、「アメリカ経済学」では新古典派、歴史学派、制度学派といった学派が主流の存在である。それゆえ、ハイエクを含むオーストリア学派の経済思想は、アメリカにおいても現在に至るまで少数派・異端の存在で在り続けている。

第二次大戦後、ナチス・ドイツから逃れるように多くのドイツ語圏の学者・知識人がアメリカへ渡った。そのなかでL. v. ミーゼスやF. マハループ、G. ハーバラーといった経済学者たちは、みなウィーンに学んだという共通点を持つ。1970年代以降、ロスバードやカーズナーというフォロワーを得て、本格的にかねらの学説がモダン・オーストリア学派として復興するが、そのなかでハイエクのRSがアメリカの経済思想に与えた影響はいかほどだったのか。これが第二の疑問である。

これらの疑問に接近するため、本稿では特に次の二つの論点を吟味したい。ひとつはハイエク体系におけるRSの位置付けの再考であり、いまひとつはRSがアメリカで受容され普及するプロセスに関する考察である。かくして、本稿での議論を次のように進める。II節ではRSの主張を追いつつ、その成立過程を明らかにし、ハイエクの体系全体のなかでRSを位置付ける。III節ではアメリカにおいてRSが出版されるまでの事情を、資料の解読から明らかにする。特に、ハイエクとマハループの手紙のやり取りから出版に至るまでの過程を解明する。IV節ではRSの出版後の影響を吟味する。RSのアメリカでの普及について検討し、リベラルや保守といったアメリカの思想状況を背景にRSのもたらした影響を論じる。V節ではこれまでの考察を踏まえ、RSの意義をハイエク体系における位置付けという内在的な観点、およびアメリカにおける受容と普及プロセスという外在的な観点の双方から検討する。VI節に結語として本稿の見解をまとめると共に、今後の課題を記

す。

## II 『隷属への道』の主張とその成立過程

### 1. 『隷属への道』の主張

はじめに、RSの基本的な主張について確認しておこう。この著作でハイエクは、ドイツのナチズムやイタリアのファシズムのような全体主義のみならず、当時影響力を増していた計画経済ですら、理性の傲慢に基づく同根の思想だとしてこれらを非難した。かれは現在計画経済を採用している資本主義の国家も、いずれ独裁へと至る『隷属への道』をたどると警告した。そこでかれの念頭にあった国は、当時住んでいたイギリスであった。

ハイエクは執筆当時の1944年の思想状況を、「…社会主義が、その自体の内実は全く変わったわけではないのに、いまでは、自由の旗印として人びとに広く受け入れられるようになってしまっている」(Hayek [1944] 2007, 76 / 訳 24)と見ていた。W.ハーコートという言葉「われわれはみな社会主義者である」を引くまでもなく、時代は社会主義へと傾いているし、経済計画は民主的に行われ、かつ自分たちの自由は守られると信じられていた。しかしながらハイエクの考えでは、人びとの自由を守りつつ社会主義国家を運営することは原理的にありえない。こうした状況に警告を発するために、思想のレベルから根本的に社会主義や計画経済を批判し、自由主義を擁護する書物を世に出す必要がある。それがかれのRS執筆の動機であった。

ハイエクの定義によれば、自由とは本来「強制がないこと」を意味するに過ぎない。「かつて政治的自由を主張した偉大な先人たちにとっては、自由という言葉は圧政からの自由、つまり他者のどんな恣意的な圧力からもあらゆる個人が自由でなければならぬことを意味していた」(Hayek [1944] 2007, 77 / 訳 26)。ところが社会主義者はその意味を曲解し、こうした自由を達成するためには社会的な制約を取り除き、

人びとが平等な状態をもたらすような社会システムが必要であるという考えを流布したという。「社会主義者たちは、『自由』を望む人びとの欲望をうまく利用し、自由の拡大を訴える。それはつまり、人びとの『強制を除去する』という本来の自由の欲求から飛躍して、平等な分配のための資源配分を推進するための新たな『自由』を導入することである」(Hayek [1944] 2007, 78 / 訳 27)。しかも、これらの自由の違いにみな気づかずに、「いまだにこの国では、大多数の人びとが、社会主義と自由とは結びつけることができると信じ続けている」(Hayek [1944] 2007, 82 / 訳 33)。

しかしながらハイエクは、そうした考え方を大きな誤解であると論難する。一度国家による計画を受け入れてしまえば、それは当局の権力の拡大を招き、真に守られねばならない自由は忘れ去られ、人びとの個人的自由の侵害をもたらす。計画の実行にあたっては、人びとの自由が少なからず制限される。そのためかれの批判は、強硬な社会主義者だけでなく、部分的であれ国家介入を許容しようとする社会民主主義者や穏健な計画主義者にまで及ぶ。

「社会主義者」は、意図的に人びとの自由を害するつもりはなく、むしろ人びとの自由を守り拡大するのが目的だと訴える。しかしハイエクによれば、かれらは結果的に大きな強制をもたらすことで、人びとを共通の計画に従わせるほかないと考えている。さらにこうした権力の集中は、さらなる計画を実行させるための少数もしくは単一の権力を生み出す。かくして、独裁者が誕生する。「独裁は強制と理想の押し付けに最も有効であり、大規模な中央計画が可能になるために欠かせないがゆえに、計画化は独裁へとむかっていくものだということ」、そして「経済体制の中央統制を実行すれば、これまで発生したどんな専制政治が行ったのにも劣らないほど完全に、個人の自由を破壊してしまうに違いない」(Hayek [1944] 2007, 110 / 訳 88)。

このように、まったく異なるかのように見える社会主義ないし社会民主主義とファシズムをハイエクが同根と扱う根拠は、それらの思想が本来守られるべき個人的自由を侵害するからである。穏健な計画思想も最終的には人びとの自由を抑圧し独裁へと至る「隷属への道」をたどるという一見極端な主張は、「ケインズ主義」の拡大により計画経済の導入が流布していた当時の世界の思想状況からすれば、かならずしも主流の意見ではなかった。だがナチズムに特に危機感を持っていたハイエクは、強い口調をもって警鐘を鳴らしたのだった。

しかしながら、ハイエクが「計画化」のすべてを否定したわけではないことには注意が必要である。かれの訴えは、市場に任せる領域とそうでない領域とを明確に分け、競争過程がうまく機能するようなシステムを導入することにある。つまり競争過程を設けるためには、例外的に政府の介入を認めざるを得ないとみなす。「有効な競争が働くための条件を作ることが不可能な分野では、経済活動を導くために、競争以外のなんらかの方法に依存しなければならないということも、まったく否定していない」(Hayek [1944] 2007, 86 / 訳 42)。競争過程をうまく機能させるためには、公的な権力の介入は排除しなければならない。自由な社会の特徴である競争過程の働きによって、諸個人の活力が生まれる。しかしながら介入を排除すべきでない分野が存在することも、ハイエクは認めているのである(Hayek [1944] 2007, 87 / 訳 45)。かれはその具体例として、「道路標識や信号」などの公的サービスや、「森林の伐採、特定の農法による環境の変更、工場のばい煙・騒音」のような公害の排除などを挙げている。このように、独裁体制のみならず、「計画化」を導入しようとする社会主義や社会民主主義に強く抗したRSにおいてすら、ハイエクは単純な意味での自由放任主義を取らなかったのである。

## 2. 刊行に至るまで

次に、ハイエクがRS刊行に至るまでのかれの活動を振り返り、当時の思考について明らかにしたい。かれは自伝的著作『ハイエク、ハイエクを語る』において、その執筆の動機を以下のように語っている。「イギリスでは1939年にはすでに、特別な状況が生じていました。国家社会主義は社会主義に対する資本主義のリアクションだと、人びとは本気で信じつつあったのです。…私が接したこの立場の主要な擁護者は、ベヴァリッジ卿でした。…私はこの主題についてベヴァリッジのためのメモを書き、それからそれを雑誌記事にしたのです<sup>4)</sup>。…その後で戦争[の間の自分の時間]を、本当は理性の濫用と凋落に関する大きな本になるだろうと予想していたものの一種の大衆版を書き上げるのに使ったのです。これは第二部、理性の凋落の部でした」(Kresge and Wenar, eds. 1994, 78 / 訳 27)。この「ベヴァリッジのためのメモ」とは、1933年4月に書かれた「ナチ・社会主義」(Nazi Socialism)である<sup>5)</sup>。ここでハイエクは、ナチズムと反自由主義が結びつく傾向にあること、そしてそれらが国家という正当性を携えて個人的自由を脅かす可能性を持つことについて言及している(Hayek 2007, 247)。

このようなアイデアをもとにRSの執筆を準備していたことは、同時期にマハループへ宛てた手紙からも明らかである。ハイエクとマハループは共にウィーン大学で学び、ミーゼスのもとでの勉強会に集まった旧知の間柄で、生涯に渡り交流を持った。マハループはハイエクに先立って1933年にはすでに渡米し、ニューヨーク州ユニバーシティ・オブ・バッファローに職を得ていた。1940年6月21日、LSEに所属しながらも戦火を恐れケンブリッジへ疎開していたハイエクがマハループに宛てた手紙には、RSにつながる内容の論考を執筆し始めていたことを示す記述がある。「…事実、時間の許す限り、私はすでに新しい本にとりかかっています

す。社会思想と政策の科学的・技術的な発展の歴史(「理性の濫用と凋落」と名付けるでしょう)です。昨年の途中にはすでに非常にはっきりとした計画を立てており、たくさんの予備的な読書をすませてあります」。そして「後半部分は、もちろん私のパンフレット『自由と経済体制』における中心的議論の精査となるでしょう」とある<sup>6)</sup>。

ここで言及されているパンフレットは、1939年の戦争のさなか疎開先のケンブリッジで書かれた。これは、短いながらもこの時期のハイエクの自由主義社会のあり方が示された文章である。かれはここで、当時多用されるようになった「計画」の意味について詳論している。ハイエクはすでに、人びとが計画という概念を混同していることや、個人的自由の領域へと国家が不必要な干渉をしていることに気づいていないことに警鐘を鳴らしていた。

ハイエクによれば、「計画」には、「自由のための計画」と「不断の干渉のための計画」がある。計画可能なのは、「なにをどのようになすべきかの決定を個々人に委ねる制度的枠組みを提供する一般的なルールの体系」のみであり、「あらかじめつくられた詳細な社会の見取り図に従う中央集権的管理」によって「人びとがいっぴきにすべきかを決定する」(Hayek 1939, 194/ 訳 50) のが計画ではない。自由な社会においては、すべての人に等しく同じルールが適用されるべきで、政府のなすべきことはその「一般的ルール」を規定することだけである。そして人びとは、そのようなルールの下で自由に行動する。こうした一般的ルールによる「法による支配」という考え方は、かれの自由論の枢要となる概念であり、後の著作でも受け継がれている。

例えば『自由の条件』では、「自由な社会と不自由な社会とを区別するものは、…私的個人は命令されることなくすべての人に等しく適用される規則だけに従うものと期待されているこ

とである」(Hayek 1960, 208/ 訳 107) という一節がある。こうした 1930 年代のハイエクの知見——ナチズム批判, 社会主義批判, そして自由な社会の基本原則たる「競争」と「法による支配」の重視——は、1944 年の RS へと受け継がれる。それは同時に、かれの社会哲学的な論考のプロトタイプであった。ハイエクは後に当時を振り返りこう述べている。「…うすうす予期していたことではあるが、この本を出発点として、その後三十年以上にわたる私の新しい分野への展開がはじまることになったのであった」(Hayek [1976a] 2007, 53/ 訳 365)。

### 3. 自由の論じ方

上記では RS とそれに至るまでのハイエクの主張について概観した。以下では特に後の著作との関連について、自由の論じ方の観点から吟味しよう。

ハイエクによる自由な社会の擁護は終世に渡って続いたが、その論じ方については変化がみられる。1950 年にシカゴ大学に職を得たハイエクは、そこで社会や文化の進化論に本格的に触れ、それ以降明確に進化論的説明を用いるようになる(江頭 2012, 50-52)。ハイエクの進化論的社会理論の骨子とは、およそ次のような説明である。自由主義社会においては市場に存在する淘汰の過程を経て残ってきた慣習やルールの存在によって、必ずしも賢明でない諸個人がうまくふるまうことができる。そして結果的に誰の設計にもよらずに文明は発展する(Hayek 1960, 59/ 訳 86)。ここで採られているのは、市場社会すなわち自由な社会の優位性とは、それを採用した方が発展するからだのみならず、いわば「手段的、機能的な自由論」である。

しかしながら RS の主眼は、ファシズムや社会主義に比べ資本主義が経済的に効率良く優位であると示すことに置かれているのではない。上述したようにハイエクの問題意識は、しのびよるナチズムや全体主義の脅威下において個人

の自由が抑圧されるかもしれないという危機感が根底にあった (Hayek [1944] 2007, 58 / 訳 xvi). そこで想定されている自由擁護論とは、自由自体を価値と置き、それが守られることがいまの西洋文明にとって必要なのだという、「価値としての自由」を強調するという論法である。

ここでの自由とは、より詳しくは個人に強制がないことであり、権力からの干渉を受けないことを指す。本来は自由とは「圧政からの自由、つまり他者のどんな恣意的な圧力からもあらゆる個人が自由でなければならないこと」であり、「従属を強いられている権力者たちの命令に従うことしか許されない束縛からすべての個人を解き放つこと」を意味する (Hayek [1944] 2007, 77 / 訳 26). そこでハイエクは、ファシズムやナチズムが、「社会主義の反動として現れたのではなく、社会主義に含まれていたいくつかの傾向の必然的な結果」(Hayek [1944] 2007, 58 / 訳 xvi) であることを示すことで、それに共通した個人の自由の抑圧という側面を批難したのであった。かくして RS における自由擁護の論拠は、その経済的な生産性の高さ、つまり「手段」として優れていることにはない。それ以前に個人的自由とは、まずもって守られなければならない「価値」なのである。

後に自ら回顧しているように、確かに RS はハイエクの自由主義の擁護論という新しい分野の開拓のきっかけとなった著作である (Hayek 1976a, 53). 上で確認したように、RS には後のハイエクの自由論にも頻出する概念——「法の支配」や競争——が導入されており、その意味では他の著作との連結も十分に考えられる。しかしその一方で、RS とハイエクの他の自由論の著作との隔たりは、自由をアプリアリに価値と置くその論じ方にある。それ以降の進化論的説明が用いられたハイエクの著作では、自由を手段として扱っている。RS が独自の位置付けにあり、かつ「政治的な書物」である根拠は、このような自由の論じ方とも大きく関わって

る。

### III アメリカでの出版に至るまで

#### 1. アメリカでの普及

Sheamur (2009, 310) によれば、RS はイギリスでは戦争による紙不足によって出版が一時危ぶまれたが、保守党の金銭的な援助で紙を調達することができた。しかし一方で、アメリカでの出版事情についてはほとんど明らかにされていないため、ここでこれを明らかにし、RS のアメリカでの普及を検討する準備としたい<sup>7)</sup>。

これまでに RS は、ハイエクの手によるもの以外にいくつかのバージョンが出版されている。マックス・イーストマン<sup>8)</sup> が記したアメリカの大衆誌『リーダーズ・ダイジェスト』に掲載された全 32 ページの縮約版 (IEA [1945] 1999)、大衆向け娯楽雑誌『ルック』に掲載された全 19 ページのカートゥーン版 (IEA [1945] 1999)、ジェネラル・モーターズ社が作成し工員などに配られた数ページのパンフレットなどである。これらすべての発行部数を合わせると、RS は様々なかたちで実に数百万部以上がアメリカで流通したことになる。ハイエクは、RS が多く的一般の人びとに受け入れられたことを実感したのは、実際に『リーダーズ・ダイジェスト』に縮約版が掲載されて以降だと述べている (Kresge and Wenar, eds. 1994, 103 / 訳 115). こうした背景を考慮すれば、ハイエクの名前やその思想の普及に貢献したのは、ハイエクの手による「通常版」だけでなく、むしろ他人の手によるより平易に書かれた「普及版」が果たした役割が大きかったとも言える。次項ではアメリカで RS が刊行されるまでの経緯を追いつつ、そこで大きな役割を果たしたマハループの貢献について明らかにしたい。

#### 2. マハループの貢献

ハイエクは RS の執筆途中から、アメリカでの発刊を希望していることを同国で生活する旧

友マハループに知らせるため、疎開先のケンブリッジから手紙を書いている。「…残念ながら私の本はまだ完成していません。今や最後の2章分の草稿を除いてすべての下書きが私の手元にあります。…私がすでに持っている分をあなたに送ろうと思っています。アメリカ版を世に出せたらよいのに、と思っているからです（そこで出版社が見つければ、の話です一紙不足で疑わしいものですが）」<sup>9)</sup>。これは、かれが早くからアメリカでも出版を望んでいたことや、当時はそれを可能にする手立てが無かったことを示している。

マハループはそれを受けてアメリカでのRSの出版に動き出すが、旧知のブラキストン社、マクミラン社<sup>10)</sup>、ブルックリン社<sup>11)</sup>といった出版社への依頼はすべて断られている。そのことを報告する手紙のなかで、マハループはハイエクに草稿を読んだ感想を伝えている。「…私はすべての手稿を読んだわけではありませんが、4つか5つの章をピックアップしてみました。私は大変に感動しました。これは大作だと思いますし、この本がこの国（訳者注：アメリカ）でも出版されることを望んでいます。そのスタイルだけでなくいくつかの略語を修正することで読みやすさは改善されるでしょう」<sup>12)</sup>。この手紙が示すように、マハループはアメリカでの出版社探しを請け負うだけでなく、その内容にも賛同していた。

### 3. マハループからシカゴ大学の人脈へ

ところが草稿の複写を受け取ったひとり、アーロン・ディレクター<sup>13)</sup>の目に触れたことで事態は好転する。マハループの手紙によれば、ディレクターは1943年当時、在留外国人財産保管所<sup>14)</sup> (Alien Property Custodian) に勤務しており、ここにマハループも所属しオフィス構えていた<sup>15)</sup>。戦時下、同所でディレクターとマハループは同僚であり、平素から交流を持っていた。マハループは上述の手紙の最後に、ディ

レクターが草稿を読んで大変熱中していたとハイエクに伝えている<sup>16)</sup>。

のちにディレクターがシカゴ大学に移るのは1946年であるため、RSを読んだ1943年当時はシカゴ大学とは直接関わり合いはなかったが、かれは同大学のフランク・ナイトとヘンリー・サイモンズにRSの草稿をハイエクに伝えずに送った<sup>17)</sup>。同年10月21日付のマハループからハイエクにあてられた手紙では、「ディレクター氏は私と同じオフィスで働いているのですが、シカゴ大学に興味を持たせるため、フランク・ナイトとヘンリー・サイモンズ宛てに手紙を書いてくれました。まだシカゴからの回答は受け取っていないようです」とある<sup>18)</sup>。しかし、結局それがきっかけとなってシカゴ大学出版から出版に向けて話が進む<sup>19)</sup>。

1944年1月にマハループはハイエクに、シカゴ大学出版がRSを出版してくれることになった旨を記した手紙を書いている。「…シカゴ大学出版があなたの本の出版を許可したことをあなたに伝えます。…以前の私の手紙からあなたはきっとわかっていたでしょうが、ディレクターとナイトはうまくいくように、十二分に力を合わせてくれたのです」<sup>20)</sup>。

かくしてRSはようやくアメリカでも出版される目処が立った。当初シカゴ大学出版は「反共」、「反社会主義」をより全面に押し出して売りだそうと、RSのタイトルの頭に「社会主義」という語を入れて「社会主義—隷属への道」(The Socialism: Road to Serfdom) とする提案をした。このことをマハループから聞いたハイエクは、直ちにシカゴ大学出版に手紙を書き、RSという著作は社会主義だけでなくナチズムにも向けて書かれた本であるから、そのタイトルはふさわしくないと説得している。

「…提案していただいたタイトルの変更については、私はかなり不満です。『社会主義』をメインタイトルにすることはいくらかミスリーディングとなるからです。私は社会主義という

ものはむしろ、すべて同じ結果を生み出すであろう諸システムのひとつに過ぎないことを強調します。…もし情報がさらに必要であるとあなたがお考えなら、副題として『計画経済の政治的帰結』と付け加えることもできるでしょう。とはいえ、私は英国版と同じタイトルの方がいいと思います<sup>21)</sup>。結局この提案は受け入れられ、アメリカ版RSはイギリス版と同じタイトルで出版されることとなった。

#### IV アメリカでの出版後の反響

##### 1. 大ヒットとハイエクの意図との齟齬

前節のような経緯を経て、RSはアメリカで1944年9月18日に初版2000部が発行された。この部数は、イギリスでの初版2000部、少し後に2500部の追加印刷という数と比較して極端に多いわけではない。しかし同年9月28日ヘンリー・ハズリットのレビューがニューヨークタイムズに掲載されると、すぐに17000部の追加注文を受ける。さらにこれを受けて、翌年1945年4月マックス・イーストマンによる縮約版が当時875万部の発行部数を誇っていた『リーダーズ・ダイジェスト』に掲載されると、ハイエクの名前は瞬く間に全米の人びとに知られることとなった(Hayek 2007, 19)。このすぐ後(同年同月)にハイエクが渡米し、5週間にわたって全米を講演旅行した際には、多くの人々がかれの言葉に熱中した。

しかしながらハイエクは、こうした急速な売れ行きに驚きを隠せなかった。かれは1956年版の前文に、当時を振り返り、こう記している。「私が同様に驚いたのは、およそこの種の書物を読むとは到底考えられない多くの人びとからの、さらに私がいまなおかれが実際に読んだのかどうかと疑っているより多くの人びとからの、本書に対する熱烈な歓迎であった。…その結果、明らかな成功にもかかわらず、本書は私が望んだような、もしくは他所で得たような効果をえられなかった」(Hayek [1956] 2007, 40)。

また1976年版の前文では、同様の口調で、「この本は全く予想外の反響を得た——当初出版するつもりはなかったアメリカ版の方が、イギリス版よりも大きな反響があった——。だが私はずっとそのことを幸福に思っていたわけではなかった」(Hayek [1976a] 2007, 53 / 訳 365)。

なぜハイエクはかように不本意な感想を抱いたのか。またなぜRSを手にとったのが「本来読むとは考えられない人びと」であったのか。これはRSが発刊された当時のヨーロッパとアメリカの思想の状況、より詳しくは、そこでの「自由」の意味の差異に起因すると考えられる。これについて次項以降に吟味したい。

##### 2. アメリカの「リベラル」の反応

当初の想定では、RSの主な読者層は、イギリスにおける社会主義的な知識階級であった(Hayek [1956] 2007, 39)。しかしながらアメリカでは一般大衆にも広く読まれることとなった。このことでハイエクは、「自由」(リベラル)という言葉がイギリスとは異なる使われ方をしている国アメリカで、自由の意味を訴えることの困難に直面する。ハイエクは1956年版の前文で、改めてイギリスとアメリカにおける「リベラル」の意味の違いを次のように指摘している。

私はリベラルという用語を一貫してその本来の意味、すなわち19世紀の意味合いで使っており、ブリテンでは「リベラル」とは今なおこの意味で使われている。現代のアメリカ人の用法では、しばしばこれとほとんど反対に近いものを意味する。「リベラル」はこの国における左翼運動のカモフラージュの一部だったのであり、現実には自由を信じている多くの間抜けな人たちに助けられ、ほぼすべての政府の支配の擁護を意味するようになった。(Hayek [1956] 2007, 55)

ここで、RS が刊行された 1940 年代後半におけるアメリカの思想的背景について、ハイエクがどう考えていたのかを見てみよう。当時ヨーロッパにおいては、社会主義やファシズムといった問題がすでに具体的なものとなっていた。その一方で、アメリカでは事情が異なり、いまだにリベラリズムの名の下で計画経済を志向する人たちが大きな勢力を持っていたという (Hayek [1956] 2007, 42)。アメリカでは、ニュー・ディール以降もリベラリズムがなお現実味を持って受け入れられていたのである。このため、アメリカにおける「リベラリズム」と社会主義やファシズムが同じ同根の思想であるというハイエクの批判は、イギリスよりも強いメッセージとして届き、アメリカのリベラル派の人たちから強い反発を招いたのである。

まず、当時のリベラル派の知識人の反応を見てみよう。例えばアメリカにおけるケインズ派の代表的な存在であるハーバード大学のアルヴィン・ハンセンは、RS を「長く読まれる本ではない」(Hansen 1945, 9) と酷評し、シカゴ大学の哲学教授のトマス・スミスは、RS における主張を「ヒステリック」で「大げさ」で、「大衆扇動的」と批難した (Smith 1945, 244)。またシカゴ大学の政治学教授のチャールズ・メリアムは、ハイエクとの討論会において、(RS は)「この国における計画の意味について人々を混乱させること以外、われわれの分野において特に重要な意味をもたない」と直接扱きおろした (Kresge and Wenar, eds. [1994] 2000, 110 / 訳 128)。

一方でアメリカのリベラルな大衆はどう受け止めたのか。縮約版の前文には、ヘンリー・ハズリットによる以下の様な前文が添えられている。「…フリードリッヒ・ハイエクは、…自由と権威との間の問題をわれわれの時代によみがえらせた。すべての善意による計画者と社会主義者、そしてすべての誠実な民主党員や心情的にリベラルな人たちに、立ち止まれ、見ろ、そ

して聞け、と注意を呼びかけている」(IEA 1999, 26)。この言葉どおり RS は、「民主党員および心情的リベラル」たちに多く読まれることとなり、激しい反発を招いた。縮約版の内容自体は、ハイエク自身が後にアメリカ版の前書きに「見事な成果」と評しているように、本来の RS の内容を概ね的確にまとめたものである (Hayek [1956] 2007, 41)。問題は、縮約版やカートゥーン版によって想定外の読者に読まれたことであった。

### 3. アメリカの「保守」の反応

他方で、アメリカにおけるもうひとつの大きな思想潮流である保守側は、RS をどう受け止めたのか。そもそも 1940 年代のアメリカの思想状況については、それ以降のように「保守」と「リベラル」が明確に対立軸として存在していたわけではなく、とりわけ保守主義は確たる思想ではなかったとする指摘がある。1950 年代のアメリカの知識人に大きな影響を与えた (本間 1987, 105) と言われる批評家ライオネル・トリリングは、1950 年に上梓した『リベラルな想像体』のなかで、(当時は)「リベラリズムがアメリカにおいて支配的であるだけでなくほとんど唯一の知的伝統」であり、「一般的な風潮として保守主義的もしくは反動的な思想がないのは明白な事実である」と述べている。しかしながらトリリングは続けて「保守主義的な衝動や反動的な衝動は、それ自身思想を表現するのではなく、思想のごときものたらんとする不快な精神ジェスチャーとして表現される」(Trilling [1950] 2008, 136) と述べている。

トリリングの描写に従えば、RS が出版され普及していく 1940 年代半ばから後半にかけては、ほぼリベラリズムだけがアメリカで広く普及していた思想なのであり、保守主義はリベラリズムと対抗できるほどの思想ではなく、一般大衆によって共有されているに過ぎない、いわば情緒的なものであった。保守主義が本格的な

思想潮流となるには、1953年に『保守主義の精神』を上梓するラッセル・カークらの登場を待たねばならなかった<sup>22)</sup>。

当時のアメリカにおける保守思想とは、あくまで大衆に共有された心情的なものであり、思想家・知識人のレベルでは本格的な勢力ではなかったのである。それにもかかわらず、RSは当時のリベラリズムに対して対抗的な感情を持っていたアメリカの「保守」的な大衆に特に好意的に読まれることとなった。結果としてRSは、ニュー・ディール以来のリベラリズムの理想を共有していた多数のリベラル派による激しい反発と、少数の保守派による心情的な支持を招くこととなった。それゆえハイエクの名前や思想は賛否併せて大きな論争を巻き起こし、かれが上記のような当惑を抱くに至ったのである。

すでに論じたように、RSでハイエクが訴えた自由の意味の本質とは、それが守るべき「価値」であり、個人の自由を権力の干渉から守ることにあった。一方でアメリカにおける「リベラル派」は、平等な社会の実現のために自由を行使する、いわば自由を「手段」として考える思想である。RSの縮約版やカートゥーン版の普及を背景とした保守主義的な一般大衆による支持とリベラル派からの激しい反発には、こうしたアメリカ独自の自由をめぐる思想状況が反映されている。かくしてRSの普及や受容は、ヨーロッパとアメリカの間で言葉上は同様の「自由」を支持する人たちの、意見の相違を浮き上がらせたのであった。

## V 『隷属への道』の意義の再検討

### 1. その他の著作との関連

本節では当初挙げた論点に立ち返るため、はじめに内在的な考察としてハイエクの仕事全体におけるRSの位置付けを再考する。特に、その後の著作と連続して捉えられる部分とそうでない部分について、Boettke (2005) の指摘に

よりながら検討したい。ベッキによれば、RSに不足しているのは経済学的な知見に基づいた議論である。なかでも次の二つが問題であるという。(1) 資源の選択の問題を取り扱っておらず、どこにそれを配分するのか、それを決定するのはどのようにするのかという現実的な問題に一切答えていない。(2) 用語の定義があいまいで、集産主義・計画経済・国家社会主義といった言葉をしばしば混同して使っているようにみえる。

ベッキの指摘の(1)については、ハイエクがRS以降経済学的な関心が徐々に薄まり、社会哲学や方法論的な考察へと関心を移行させていったこととも関わるだろう。確かにRSにおいては自由主義社会の経済面に関する考察が不足しているように見える。また具体的な政策論に立ち入っているわけでもない。より詳細で具体的な議論はより後の著作まで見送られた課題であろう。RSで展開された市場擁護論は「法による支配」と「競争過程」の重視が中心であったから、市場秩序の発展に関するより詳細な論究は、カタラクシー概念や自生的秩序論、文化的進化論などを導入した『自由の条件』(1960)と『法と立法と自由』(1973, 76, 79)以降で展開されることとなる。

(2)の指摘については、RSが『理性の濫用と凋落』プロジェクトのひとつであったことに引きつけて考えたい。ベッキの言うように、確かにハイエクの用語の用い方にはしばしば混同がみられる。しかしながらここで重要なことは、ハイエクの批判が、一貫してこれらに共通する「合理主義」を対象としていたことである。

マハループ宛の手紙で明らかにしたように、1940年代のハイエクは、社会主義や設計主義を方法論や思想のレベルから根本的に批判するため、一連の著作を世に問うことを考えていた。この「理性の濫用と凋落プロジェクト」の端緒として世に出されたのがRSであり、残りの論考は1952年『科学による反革命』として具体

化される。そうした複数の著作に通底しているのは、社会主義や設計主義、国家社会主義など、人間の理性に過度の信頼を置く「思い上がった」思想をすべて「合理主義」として退ける態度である。

1950年に渡米しシカゴ大学に赴任したハイエクは、ほぼ50年代を三冊分の大著『自由の条件』の執筆に費やした。この本では、RSに見られる「法による支配」や一般的ルールの機能についてさらに展開した。それゆえRSは、一般向けの本でありながら、後の専門的な著作との連続性・関連性も十分に考えられる著作である。

ただし本稿では、RSとそれ以外の著作との関連を指摘した一方で、それが独自の位置付けにある理由を、自由の論じ方や思想の大衆化の問題に見出した。RSで重視されている自由とは、まずもってナチズムや全体主義から個人の自由を守るという「価値」としての自由である。それは、人びとが利益を得る機会を増大させるから自由の体制は擁護されるべきだとする、「手段」としての自由を強調する後の論法とは異なる。それゆえハイエクの体系においてRSとは、後の自由論の基礎であるとともに、それ以降の論調とは一線を画す著作と理解できる。

## 2. 普及過程におけるマハループの役割

次に、RSの受容や普及プロセスの検討を通じて得た知見を概括しておこう。本稿では、RSが出版されるまでに果たしたマハループの尽力を明らかにした。マハループの役割はとりわけ出版される前の段階での役割が大きいものの、多くの人間と交わされた書簡から見える事実は、単にマハループが筆まめであったことやかれの労苦を示すだけにとどまらない。かれのアメリカにおける豊富な人脈や広範なネットワークは、自由主義経済思想が拡大、普及する際の、多くの人物の関わりを示している。

マハループはハーバラーやモルゲンシュテル

ンと同様に、主流派経済学のなかでも一定の地位を築くことができた。このためウィーン出身でありながら、かれのモダン・オーストリアンもしくはアメリカにおけるオーストリア学派としての存在感は、ミーゼスやハイエクほど大きいものではない。しかしRSの出版先をいち早く探し、結果的にハイエク経済思想のアメリカでの普及・大衆化に一定の役割を果たした。それは、1940年代以降アメリカやヨーロッパの自由主義思想の信奉者の集まりであるモンペルラン・ソサイエティの組織にもつながる重要な貢献である<sup>23)</sup>。それゆえマハループは、モダン・オーストリア学派の知的ネットワークの形成にとどまらず、より広くアメリカでの自由主義経済思想の受容や普及に一定の役割を果たしたとみなせよう。

## 3. ハイエクとマハループの「自由主義」

ハイエクとマハループの交友関係は、単なる書簡のやり取りにとどまらず、自由主義思想に関する内在的な影響関係も含んでいる。このことについて、以下に検討してみたい。

マハループは、ハイエクの生誕70周年を記念して1969年に発刊された論文集に「自由主義と自由の選択」という論文を寄稿している。この論文の元になったアイデアは1955年に書かれた小論であり、RSに影響を受けたマハループの自由主義観が読み取れる。

ここでかれもハイエクと同様に、ヨーロッパとアメリカにおける「リベラル」の意味合いの倒錯を指摘する(Machlup 1969, 118)。さらにアメリカ固有の背景として、ジョンソン大統領やルーズベルト大統領の宣言での「…することの自由 (free to)」と「…からの自由 (free from)」の混同を指摘し、本来の政府の不干渉という自由から、政府がなにかをなすべきだという自由への変容があったと述べる(Machlup 1969, 118)。続けてマハループは独自の分析として、経済的自由、政治的自由、知的道徳的自由とい

う三つの分類を導入し、それぞれに様々な自由があることを指摘する。だが、ここで自由主義者のあるべき態度とは、それらの選択について自由であることで、特定の自由を奨励したりけなしたりすることではない (Machlup 1969, 143)。こうしたかれの考察は、「もっとも悲惨な分裂は、経済的リベラルに敬意を払わない知的リベラルと、知的リベラルに敬意を払わない経済的リベラルとの間にあり、そのような「反自由主義者や部分的な自由主義者は、互いにファシストや共産主義者と呼び合っているにもかかわらず、かれらの立場がもっともらしい議論によって理屈付けられることがある」(Machlup 1969, 144) というアメリカのリベラル派への批判に向かう。

このようにマハループは、RS でのハイエクのスタンスを受け継ぎ、アメリカにおけるリベラルについてさらに踏み込んで議論し、かれらを批判している。そして、アメリカの知的世界にハイエクを紹介しただけでなく、自身も思想的にかれに近い立場でアメリカの自由主義を評価していた。

#### 4. 出版以降のアメリカにおけるハイエク

さらにここでは、RS 以降のハイエクのアメリカにおける活躍について吟味したい。RS の出版社がなかなか見つからなかったことや、出版後のアメリカでの成功は、ハイエクがのちにシカゴ大学に招聘されるきっかけのひとつとなったと言える<sup>24)</sup>。出版社探しの過程で、かれの名前はアーロン・ディレクターやフランク・ナイトなど、シカゴ大学の人脈に知られることとなった。そもそもシカゴ学派の意向がシカゴ大学出版にも大きな影響を持っていたことを鑑みれば、ここでシカゴ学派の思想が社会主義に反対し自由主義を歓迎するものであったことが確認できる。

しかしながらナイトに関し多くの研究業績を持つエメットが鋭く指摘しているように、ハイ

エクの自由主義論はシカゴ学派の面々から、必ずしも肯定的に受け取られたわけではない (Emmett 2007)。例えば、出版前に目を通したフランク・ナイトは、RS を「…よくできているが、視野が限られ、いくぶん一面的な扱いとなっている。この国においてたいへん大きな市場を得るかどうかが、多くの読者の立場を変化させるかどうかについては疑わしい」(Knight 1943, 249) と評しており、ハイエクの主張を手放しで褒めてはいない。

エメットが述べるナイトの理解によれば、ハイエクの研究課題 (『理性の濫用と凋落』プロジェクト) の問題は、自由な社会と文化的進化の二つの概念を結びつけている点にある。「ナイトによるハイエクへの挑戦は、『法による統治』の進化ではなく、自由な社会内部での『議論による統治』の文化的進化を考慮した自由な社会の制度に関する説明をすることにある」(Emmett 2007, 68)。つまり、衝突が起きた際も、進化のプロセスに解決があるのではなく、議論によって解決すべきだというのである。このプロジェクトの一環として位置付けられる RS におけるハイエクの議論は、一貫してリベラル派の社会行動に対して否定的であり、政府の役割を不干渉にしておくことに重点が置かれていた。しかしナイトは、そのような行動をすべて否定するのではなく、自由な社会内部で意見の調整や話し合いを行うことで、よりよい配分がもたらされるはずだと指摘する。

このナイトによる批判は、ハイエクの進化論的説明が『自由の条件』以降本格的に導入されたことを考慮する必要がある。しかしながらリベラル派も自由を侵害するとみなす RS におけるハイエクの考えに対しても、有効な反論となりうるだろう。出版への活動を通じて RS がシカゴ大学の面々に読まれたことは、その後かれがアメリカで職を得るきっかけのひとつとなったとも言える。しかし同時にそこで受けた評価は肯定的なものだけではなかった。のちに同大

学に招聘された際、所属が経済学部ではなく社会思想委員会であったのは、そうした事情も関連しているという指摘もある (Nef 1973, 37)。かくして、ナイトとハイエクの自由主義の間には、懸隔があることがわかる。

## VI 結語——自由主義の多様性をめぐって——

最後に、冒頭で提示した二つの論点について簡単にまとめて結語としたい。第一に、ハイエクの著作群のなかでの RS の位置付けについては、その独自性と関連性を指摘した。自由を「価値」として論じた RS では、後に受け継がれる「競争」や「法の支配」といった概念はみられるものの、かれの体系で特に重要な自生的秩序や文化的進化論は、よりあとの著作で導入されたものである。第二に、RS がアメリカにおいて人びとに受容されていく過程については、RS が引き起こしたりベラル側の反発と保守側の支持の理由を、縮約版や漫画版などの普及版の存在により想定外の読者層に読まれたことにも求めた。

アメリカの自由主義経済思想は、RS の普及以降も多くの論者によって論じられ、70年代から80年代にかけて「新自由主義」が再び台頭する<sup>25)</sup>。しかしながら先行研究が示すように、ハイエクとシカゴ学派の経済思想は異なる (江頭 2012)。またかれ自身が組織したモンペルラン・ソサイエティで共有されていた自由主義経済思想とも同じではない (Jackson 2010)。さらには 1980 年代以降の新自由主義とハイエク思想との関連も限定的である (吉野 2008)。このようにヨーロッパとアメリカで自由の意味がまったく異なるだけでなく、アメリカの自由主義者のなかでも様々な論じ方がある。こうした多様な自由主義のなかでのハイエク思想の位置付けや、それらに与えたかれの影響については、今後も検討の余地があるだろう。

吉野裕介：京都大学大学院文学研究科

## 注

- 1) 決定版が上梓された 2007 年の翌年、日本でも西山千明による新訳 (Hayek 1976a) が出版されている。これは 1956 年版のハイエクの前文、1976 年版のフリードマンの前文を含めて訳出されたもので、Serfdom を隷属と訳すのもそれに従っているが、西山訳は決定版を使用した翻訳ではないと思われる。本稿では、決定版と西山訳を対応させて引用頁を記す。
- 2) ハイエクの長い執筆活動の間に起きた関心の移行や方法論の変遷、いわゆる「ハイエクの転換」問題については、ここでこれ以上立ち入らない。ただし本稿のスタンスは、ひとつの著作や論文を境にハイエクの方法論が劇的に変わったとする「転換説」よりも、度重なる住居の移動や長きにわたる執筆活動の中で、かれの論調に漸次的な変化が起きたという「連続説」に依拠する。
- 3) 他に主な先行研究として以下がある。例えば Boettke (1995) は、ハイエクが RS をきっかけとしてミーゼスの市場経済の擁護論を精緻化したことを評価しつつ、その視角がオーストリア的な分析を越えるものではないと評する。Shearmur (2009) は RS がイギリスの保守系知識人に与えたインパクトを強調し、ハイエク自ら政治的な書物と称しておきながら政党政治に与える影響を十分に考察しなかったと指摘している。国内の先行研究 (古賀 1983, 江頭 1999, 山中 2007) では RS のとりわけ政治思想の側面が強調されている。それゆえ、RS そのものの形成過程を史的関心から扱った研究論文はほとんどみられない。
- 4) 1938 年に同じ題のパンフレットを執筆し、それを改稿したものが 1939 年の当該論文である。どちらも Hayek (2007) に収録されている。
- 5) Hayek (1933), Hayek Papers, box 105, folder 10, Hoover Institution Archives, copyright Stanford University. コールドウェルによるイントロダクションからも明らかである (Hayek 2007, 5)。
- 6) Letter, F. A. Hayek to Fritz Machlup, June 6, 1940, Machlup Papers, box 43, folder 15, Hoover Institu-

- tion Archives, copyright Stanford University. この「理性の濫用と凋落に関する大きな著作」は、科学主義の誤謬を問うためにハイエクが準備していたプロジェクトである (Caldwell 2003, 258). 結果的にその一部は『科学による反革命』に収録された方法論に関する論文となり、一部の政治思想的論考は『隷属への道』として結実した。
- 7) コールドウェルはRS決定版の前文で「アメリカの出版社探し」として一連の出来事を追っている (Caldwell 2007, 15-18).
  - 8) マックス・イーストマン (Max Eastman, 1883-1969) は政治的活動も行ったアメリカ人の作家である。ハイエクは、1956年版RSの序文でイーストマンについて、「もともとはロシアの社会主義に共感を抱いていたが、のちに転向した人物」と記している (Hayek 2007, 41).
  - 9) Letter, F. A. Hayek to Fritz Machlup, Aug. 8, 1942, Machlup Papers, box 43, folder 15, Hoover Institution Archives, copyright Stanford University.
  - 10) Letter, F. A. Hayek to Fritz Machlup, Jan. 21, 1942, Machlup Papers, box 43, folder 15, Hoover Institution Archives, copyright Stanford University.
  - 11) Letter, Fritz Machlup to Harry D. Gideonse, Sep. 9, 1943. Machlup Papers, box 43, folder 15, Hoover Institution Archives, copyright Stanford University.
  - 12) Letter, Fritz Machlup to F. A. Hayek, Aug. 9, 1943, Machlup Papers, box 43, folder 15, Hoover Institution Archives, copyright Stanford University.
  - 13) アーロン・ディレクター (Aaron Director, 1918-2001) はミルトン・フリードマンの妻の兄である。シカゴ大学およびスタンフォード大学のアーカイヴズに確認できるように、ディレクターとハイエクおよびマハループとの間には多くの書簡のやり取りが残されており、ハイエクのシカゴ大学移籍以前からの交流が伺える。
  - 14) 同所は第一次世界大戦時から第二次世界大戦終了後まで設置されていた、外国人の財産を管理し経済活動を把握するためのアメリカ政府直属の機関である。
  - 15) 当時の書簡類に記されたマハループの郵便物の宛先はすべて、勤務していた大学であるユニバーシティ・オブ・パツファローではなく、この在留外国人財産保管所となっている。Machlup Papers, box 43, folder 15, Hoover Institution Archives, copyright Stanford University.
  - 16) Letter, Fritz Machlup to F. A. Hayek, Aug. 9, 1943, Machlup Papers, box 43, folder 15, Hoover Institution Archives, copyright Stanford University.
  - 17) Letter, Fritz Machlup to Harry D. Gideonse, Oct. 21, 1943, Machlup Papers, box 43, folder 15, Hoover Institution Archives, copyright Stanford University.
  - 18) Letter, Fritz Machlup to F. A. Hayek, Oct. 21, 1943, Machlup Papers, box 43, folder 15, Hoover Institution Archives, copyright Stanford University.
  - 19) シカゴ大学内部でのRS出版に至る審査の過程についてはコールドウェルの前文も参照 (Caldwell 2007, 16).
  - 20) Letter, Fritz Machlup to F. A. Hayek, Jan. 4, 1944, Machlup Papers, box 43, folder 15, Hoover Institution Archives, copyright Stanford University.
  - 21) Letter, F. A. Hayek to Joseph A. Brandt, Feb. 26, 1944, Machlup Papers, box 43, folder 15, Hoover Institution Archives, copyright Stanford University.
  - 22) 二十世紀後半のアメリカにおける保守主義の発展については、例えば橋本 (2007) を参照。
  - 23) モンペルラン・ソサイエティの形成過程については、Mirowski and Plehwe, eds. (2009) を参照。
  - 24) RS以降のシカゴ学派の発展に関する研究は例えばSkousen (2005) やFreedman (2008) を参照。
  - 25) 1950年代のハイエクに与えたシカゴ学派の影響については、江頭 (2012) を参照。

## 参考文献

- Boettke, P. 1995. Hayek's the Road to Serfdom Revisited: Government Failure in the Argument against Socialism. *Eastern Economic Journal* 21 (1): 7-26.
- . 2005. On Reading Hayek: Choice, Consequences and The Road to Serfdom. *European Journal of Political Economy* 21 (4): 1042-53.
- Burton, J. 1984. Introduction. In *Hayek's Serfdom Revisited: Essays by Economists, Philosophers, and Political Scientists on The Road to Serfdom After 40*

- Years*, edited by B. P. Norman and A. Seldon. London: Institute of Economic Affairs: ix-xii.
- Caldwell, B. 2003. *Hayek's Challenge: An Intellectual Biography of F. A. Hayek*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- . 2007. Introduction. In *The Road to Serfdom: Text and Documents—The Definitive Edition*. Chicago: Univ. of Chicago Press: 1-33.
- Emmett, R. B. 2007. Knight's Challenge (to Hayek): Spontaneous Order is not enough for Governing a Liberal Society. In *Liberalism, Conservatism, and Hayek's Idea of Spontaneous Order*, edited by L. Hunt and P. McNamara. London: Palgrave Macmillan: 67-86.
- Freedman, C. F. 2008. *Chicago Fundamentalism: Ideology and Methodology in Economics*. Hackensack: World Scientific Publishing.
- Hansen, A. 1945. The New Crusade Against Planning. *New Republic*, January 1, (12): 9-10.
- Hayek, F. A. 1933. Nazi Socialism. Hayek Papers, box105, folder 10, Hoover Institution Archives, Stanford University.
- . 1939. Freedom and the Economic System, in *Socialism and War*. Chicago: Univ. of Chicago Press: 189-212. 「自由と経済体制」尾近裕幸訳『社会主義と戦争〔新装版ハイエク全集 第II期10巻〕』春秋社, 2010: 43-76.
- . 1944. *The Road to Serfdom*. London: Routledge.
- . 1946. *The Road to Serfdom, US edition*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- . 1952a. *The Counter Revolution of Science: Studies on the Abuse of Reason*. London: Free Press. 渡辺幹雄訳『科学による反革命〔新装版ハイエク全集第II期3巻〕』春秋社, 2007.
- . 1952b. *The Sensory Order: An Inquiry into the Foundations of Theoretical Psychology*. London: Routledge. 穂山貞登訳『感覚秩序〔新装版ハイエク全集第I期4巻〕』春秋社, 2008.
- . 1956. *The Road to Serfdom*, Paperback edition. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- . 1960. *The Constitution of Liberty*. Chicago: Univ. of Chicago Press. 気賀健三・古賀勝次郎訳『自由の条件I, II, III〔新装版ハイエク全集第I期5, 6, 7巻〕』春秋社, 2007.
- . 1973. *Law, Legislation, and Liberty, vol. 1: Rules and Order*. London: Routledge & Kegan Paul. 矢島鈞次・水吉俊彦訳『法と立法と自由1—ルールと秩序〔新装版ハイエク全集第I期8巻〕』春秋社, 2007.
- . 1976a. *The Road to Serfdom 2nd ed.* Chicago: Univ. of Chicago Press. 西山千明訳『隷属への道〔新装版ハイエク全集別巻〕』春秋社, 2008.
- . 1976b. *Law, Legislation, and Liberty, vol. 2: The Mirage of Social Justice*. London: Routledge & Kegan Paul. 篠塚慎悟訳『法と立法と自由2—社会主義の幻想〔新装版ハイエク全集第I期9巻〕』春秋社, 2008.
- . 1979. *Law, Legislation, and Liberty, vol. 3: The Political Order of a Free People*. London: Routledge & Kegan Paul. 渡部茂訳『法と立法と自由3—自由人の政治的秩序〔新装版ハイエク全集第I期10巻〕』春秋社, 2008.
- . 1994. *The Road to Serfdom, 3rd ed.* Chicago: Univ. of Chicago Press.
- . 2007. *The Road to Serfdom: Text and Documents—The Definitive Edition*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- IEA (Institute of Economic Affairs). [1945] 1999. The Condensed Version of The Road to Serfdom by F. A. Hayek. In the April 1945 edition of *Reader's Digest*.
- Jackson, B. 2010. At the Origins of Neo-liberalism: The Free Economy and the Strong State, 1930-1947. *Historical Journal* 53 (1): 129-51.
- Knight, F. 1943. Reader's Report. In Hayek (2007): 249-50.
- Kresge, S. and L. Wenar, eds. 1994. *Hayek on Hayek: An Autobiographical Dialogue*. Chicago: Univ. of Chicago Press. 嶋津格訳『ハイエク, ハイエクを語る』名古屋大学出版会, 2000.
- Machlup, F. 1969. Liberalism and the Choice of Freedoms. In *Roads to Freedom: Essays in Honour of Friedrich A. von Hayek*, edited by E. Streissler. London: Routledge: 117-46.
- . n. d. Machlup Papers, box 43, folder 15, Hoover Institution Archives, Stanford University.
- Mirowski, P., and D. Plehwe, eds. 2009. *The Road from Mont Pelerin: The Making of the Neoliberal Thought Collective*. Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press.
- Nef, J. 1973. *The Search for Meaning: The Autobiography of a Nonconformist*. New York: Public Affairs.
- O'Hear, A. 2006. Hayek and Popper: The Road to Serfdom and the Open Society. In *The Cambridge*

- Companion to Hayek*, edited by E. Feser. Cambridge: Cambridge Univ. Press: 132-47.
- Shearmur, J. 2009. Hayek, The Road to Serfdom, and the British Conservatives. *Journal of the History of Economic Thought* 28 (3): 309.
- Skousen, M. 2005. *Vienna & Chicago, Friends or Foes?: A Tale of Two Schools of Free-Market Economics*. Washington, D.C.: Capital Press.
- Smith, T. V. 1945. Review: The Road to Serfdom by Friedrich A. Hayek. *Ethics* 55 (3): 224-26.
- Trilling, L. [1950] 2008. *The Liberal Imagination (Kindle Edition)*. New York: NYRB Classics.
- 江頭 進. 1999. 『F. A. ハイエクの研究』日本経済評論社.
- . 2012. 「ハイエクとシカゴ学派—方法論と自由主義」『経済学史研究』53 (2): 41-58.
- 久保芳和. 1988. 『アメリカ経済学の歴史』啓文社.
- 古賀勝次郎. 1983. 『ハイエクと新自由主義—ハイエクの政治経済学研究』行人社.
- 高 哲男. 2004. 『現代アメリカ経済思想の起源—プラグマティズムと制度経済学』名古屋大学出版会.
- 田中敏弘. 2002. 『アメリカの経済思想—建国期から現代まで』名古屋大学出版会.
- 橋本 努. 2007. 『帝国の条件—自由を育む秩序の原理』弘文堂.
- 本間長世. 1987. 『アメリカはどこへ行くのか—岐路に立つ超大国の苦悩』PHP 研究所.
- 山中 優. 2007. 『ハイエクの政治思想—市場秩序にひそむ人間の苦境』勁草書房.
- 吉野裕介. 2008. 「第7章 アメリカは真に「自由な社会」なのか?—1980年代アメリカの「新自由主義」とハイエク思想」『アメリカ社会を動かすマネー』所収, 杉田米行編著, 三和出版: 233-64.

F. A. Hayek's *The Road to Serfdom*:  
Acceptance and Diffusion in the United States

Yusuke Yoshino

In this paper, we consider F. A. Hayek's *The Road to Serfdom* and the diffusion of the book's ideas in the United States. The contributions of Fritz Machlup in the book's development and acceptance are given special attention.

Although *The Road to Serfdom* is Hayek's best-selling book, many Hayekian scholars choose to focus on his other work. Here, we analyze the ideas of *The Road to Serfdom* in detail, so that we can find new aspects of Hayek's early thought and determine why the book has become so influential.

Hayek wrote *The Road to Serfdom* for the intelligentsia of England, but its impact was felt most strongly by the general populous of the United States. Hayek maintained the core ideas of the book, the rule of law and meaning of competition, in his later work, such as *The Constitution of Liberty and Law, Legislation, and Liberty*.

Hayek and Machlup were in contact with each other their entire lives. The Hoover Institution, a think tank at Stanford University, houses large amounts of correspondence that illustrate

the friendship between the two men. Some material shows Machlup putting great efforts toward publishing *The Road to Serfdom* in the United States. Eventually, Aaron Director and Frank Knight helped Hayek publish the book with The University of Chicago Press. The condensed, illustrated version of *The Road to Serfdom* played an important role in diffusing its ideas to a general readership in the United States.

The publication of *The Road to Serfdom* was the beginning of a long relationship with the University of Chicago for Hayek, and the success of the book enabled him to immigrate to the United States. Indeed, we argue that *The Road to Serfdom* was the prototype for his later books, *The Constitution of Liberty and Law, Legislation, and Liberty*. However, we believe there is a disparity between how Hayek viewed his ideas and the way people interpreted his work. One of the primary reasons for this was the difference in the usage of the word "liberal" in England and the United States.

JEL classification numbers: B 25, B 31.